The Pacific Society

流転の鐘歴・汎太平洋の鐘

THE PAN PACIFIC BELL

—戦前のサイパン島での鐘の音をいま小石川の緑蔭に聞く—

財団法人南洋群島協会理事 武村次郎

"玉砕"を免れて、アメリカから帰山した梵鐘

戦前のサイパン島で生活した人は、ガラパン町郊外ポンタムチョの、南洋寺境内から響き渡る鐘の音を耳にしたであろう。

この梵鐘は江戸文化の開花期、元禄三年の創鋳後約三〇〇年、この間太平洋を航すること三たび、数奇な運命のもとに、いま万身に弾痕と傷痍をとどめながら、東京小石川の源覚寺（三好祐昭住職）に帰山し、「汎太平洋の鐘」と名づけられ、再建された鐘楼につるされて、平和の願いをこめた荘重な音色を響かせている。

この梵鐘は、戦前旧南洋群島に所在した文化財のうち、日米相互の善意と努力のもと、日本への返還が実現した極めて稀な事例でもあるので、ここにその流転の鐘歴を紹介したい。

所在・東京都文京区小石川二—二三—一四
浄土宗・源覚寺
（通称こんにゃくえんま）

響け・鎮魂百八の鳴鐘

昭和一九年七月七日、サイパン島において、わが陸海軍幾万の将兵は、死闘のすえ玉砕して果てた。そして「在留邦人は終始軍に協力し、およそ戦い得る者は敢然として戦闘に参加、おおむね将兵と運命を共にせるものの如し」と大本営が発表した民間犠牲者は一万人に達したといわれる(注一)。今年七月七日は、このサイパン島の悲劇から数えて、ちょうど四〇年のその日である。

この日、再びサイパン島に渡った一五〇貫（約五六〇キロ）の汎太平洋の鐘は、旧日本軍司令部跡に程近い「中部太平洋戦没者の碑」（注二）の前につるされ、

汎太平洋の鐘の前に立つ源覚寺三好住職。
左端は南洋群島平和慰霊像。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

午前九時源覚寺三好祐昭住職ならびに慰霊祭参会者の手により、鎮魂百八の鐘が撞ち鳴らされ、さらには、同日午後五時ガラパン郊外旧南洋寺境内において、同じく平和の鐘声を響き渡らせた後、源覚寺に持ち帰られる。

苦節三〇〇年の鐘歴をたどる

元禄三年（一六九〇）

五月一五日、鋳造をおえ、信徒によって武州豊島郡江戸小石川常光山源覚寺に奉納された。

天保一五年（一八四四）

四月五日、「富坂大火」により源覚寺は一山炎上、その後幕末、明治、大正を通じて鐘楼は再建されなかったので、約一〇〇年間一度もこの鐘の響鳴を聞くことはなかった。

昭和一二年（一九三七）

一二月、サイパン島南洋寺に貸し出されたこの梵鐘は、南洋興発㈱社長松江春次の寄進により落成した鐘楼につるされ、百年ぶりの撞鐘が復活した。

（南洋寺は昭和七年の創建、住職は、時の源覚寺住職と同宗同門の青柳貫孝。青柳住職は南洋寺の境内にサイパン高女の前身、南洋家政女学校を創立した教育者でもあった）

昭和一九年（一九四四）

七月、サイパン島玉砕、南洋寺も破壊された。そして、戦後引揚げた南洋寺青柳住職は、元サイパン島居住者数百名の署名を集めGHQに梵鐘返還の請願を行ったが、鐘の行方は杳としてわからなかった。

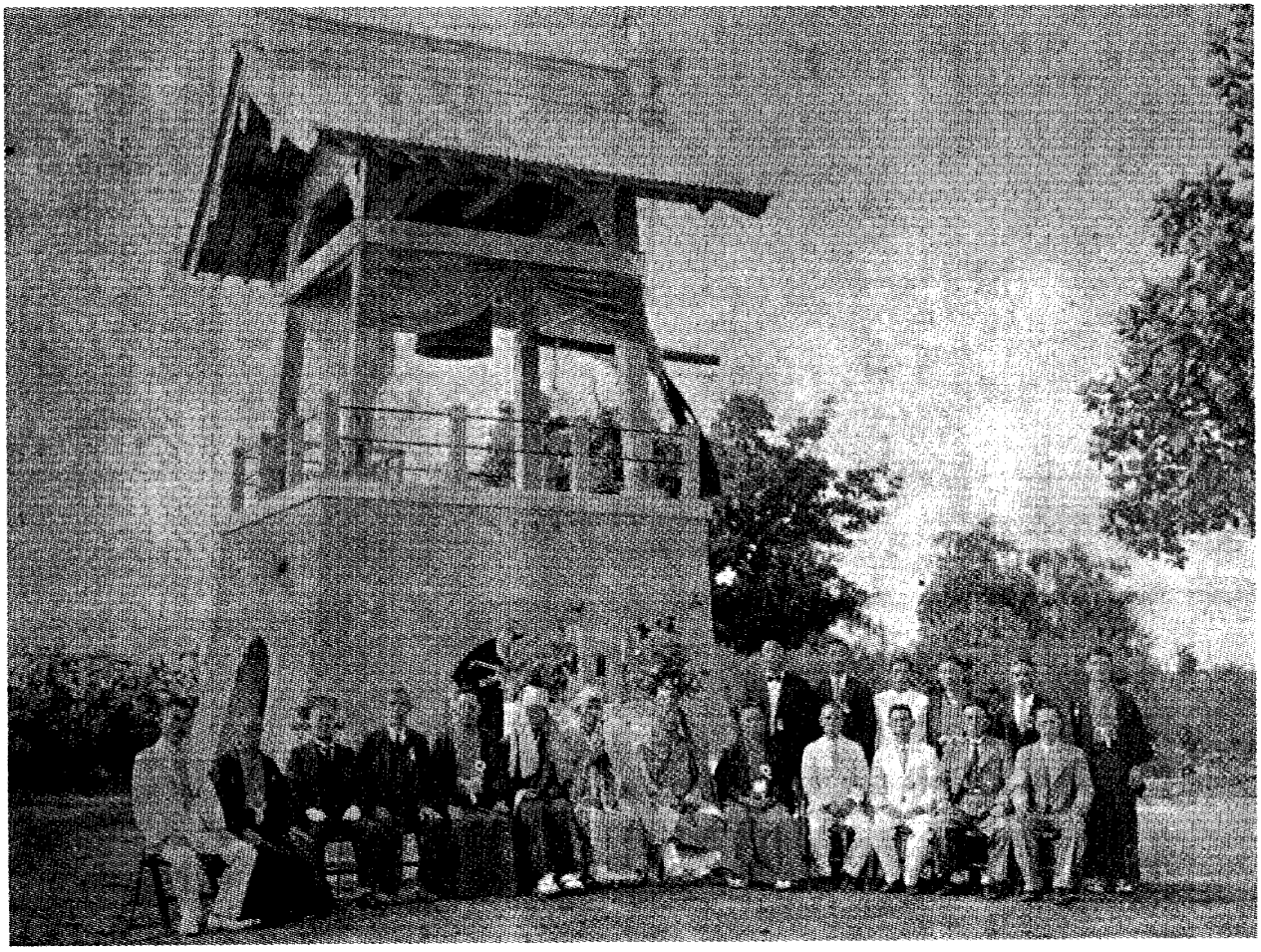
昭和四〇年（一九六五）

八月、偶然テキサス州オデッサ市で発見された。時の所有者はウエスト・テキサス・メタル・カンパニー。発見者はその隣に住む在米邦人のミツエ・ヘスター夫人。見つけたのは、この金属会社の納屋の中。「溶かしてしまう」と聞いてビックリ。早速鐘銘をたよりに日本の文部大臣に照会した。

この文書の写は、源覚寺にも届けられたが、時の住職の意向もあり、文化財保護委員会事務局長から「源覚寺には鐘楼がないので、適当な場所に保存願えればありがたい」との回答がなされたまま、再び消息は絶えてしまった。

昭和四八年（一九七三）

一一月、カリフォルニア州オークランド市に所在することが確認された。現三好住職は同年一二月に就任するが、その二カ月前本堂内を検分中、偶然ヘスター夫人からの照会文写を発見、機を逸せずオデッサ市長、商工会議所等に打電照会した結果、最終所有者はドナルド・クレアー氏であること、鐘はオークランド市のドナルド・クレアー



南洋寺鐘楼落慶法要記念写真（昭和一二年一二月、サイパン）。この鐘楼は南洋興発㈱松江社長の寄進によって落成した。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

海洋博物館に戦傷の梵鐘として展示中であることがつきとめられた。

それから数カ月にわたり、彼我の交渉が続けられた結果、クレアー氏の善意により、鐘は米国の仏教団本部を経由して、源覚寺に返還寄贈されることになった。

昭和四九年（一九七四）

四月三〇日、サンフランシスコ市において梵鐘返還の儀がとり行われた。この際、本来古色蒼然たるべき鐘は、最終所有者手ずからの塗粧により金色さん然たる姿になりかわり、臨場した三好住職を驚かせたが、これもアメリカ人の善意のなせる業であったろう。今日この鐘にわずかながら金色をとどめているのは、当時のなごりである。

七月一五日。鐘は源覚寺に帰山、一〇月一六日ドナルド・クレアー氏列席のもとに帰山法要が営まれ、汎太平洋の鐘（THE PAN PACIFIC BELL）と命名された。

昭和五七年（一九八二）

二月二七日、源覚寺の鐘楼が再建され、汎太平洋の鐘は仮鐘楼から移しつるされた。

天保年間の炎上から一三九年目、南洋寺の滅失から三九年目の鐘楼復興で、落慶法要は九月一五日。素材の桧は台湾からの直輸入である。

付記

小石川源覚寺には、鐘楼に隣り合わせて、昭和五〇年七月一八日の開眼にかかる「南洋群島平和慰霊像」がある。この七月一八日は、サイパン玉砕の大本営発表が行われた日であるが、この像は、昭和四七年一月二二日、サイパン島マッピー山頂に、恒久の平和と殉難者の慰霊を希求して建設された平和慰霊像と寸分たがわないみろくぼさつの青銅立像で、サイパンに向って安置され、それぞれ毎年同寺三好住職を導師として、盛大な法要が営まれている。

なお、この仏像は当初三体が製作され、サイパンと源覚寺のほかの一体は、本年二月キリバス共和国名誉領事栗林徳五郎氏の私邸において開眼の儀をおえ、三月中旬ギルバート諸島タラワ環礁ベシオ島に祀られた。

源覚寺には、このほか、こんにゃくえんまの通称の由来する大えんま坐像（寛文一二年作）等の文化財があり、その門前町は商店街として賑っているが、財団法人南洋群島協会の事務所も同寺の境内にある。

また、三好祐昭師は、慶応義塾大学経済学部卒、かつては東急グループの東急車輌製造㈱に勤務の経歴をもつ異色の住職で、当学会五島会長とも不思議なえにしにつながっている。

（注一）サイパン戦でのわが軍の戦没者数について、厚生省援護局は、陸軍二八、一一〇名、海軍一五、一六四名計四三、二七四名と公表している。総兵力四五、三二一名に対し、約九六%。文字どおりの全滅であった。なお、在留邦人の犠牲者については、その実数を明らかにしていない。

（注二）中部太平洋戦没者の碑は、昭和四九年、日本国政府と信託統治地域政府により建立された。

新刊

「幕末小笠原島日記」

田中 弘之 校訂

文久元年十一月、徳川幕府は駐日各国公使に小笠原島の回収を通告した。同年十二月、咸臨丸が外国奉行水野忠徳を長とした回収団を乗せて、父母二見島に到着して、小笠原島が日本の領土であることを住民に知らせ、領有の実績を固めた。

この回収に当たって、イギリスの主張する領有権をめぐる外交上の難問を抱えていた。

この咸臨丸の小笠原渡航に同行したのが、八丈島の地役人菊池作次郎で、同行に至った経緯から、標題のとおり小笠原での行動記録その他を丹念に残した。この「日記」は、これまでも一部分が公開されたことはあるが、全文にわたり、しかも校訂を施されたのは初めて。

幕府の目付として参加した服部帰一の「南島航海日記」（未公刊）もあるが、それと表裏をなすものといえる。

スケッチも入れてあり、例えば「くのふ舟」（カヌーのこと）なども、寸法とともに図となっている。絵といえば、やはり同行した宮本元道が残した「小笠原島真景図」の一部も、巻頭の口絵に参考引用してある。

（A5判、二五四ページ、緑地社、二、八〇〇円）

NII-Electronic Library Service